

ける狸を見し事ありけり、この時は狸二三頭を、前を竹簞子にせし箱に入れて、その座右に置きたり、毛いろのいさゝか異なるを、いかにぞやとたづねしに、一頭は玉面狸なり、その餘はよのつねなるものなりとて、ほこりがにとき示しにき、この、ち文化の初にや有りけん、誰やらが書畫會の席上にて、又彼狸庵に面をおはせし日、渠が年來秘藏すと聞えたる狸石を携へ來て、予にも見せ、人々にも見せけり、その石はまろくして、長さは纔二寸に足らず、薄青白なる石のうち、黒く三四分ばかりなる狸のかたちあり、是天然のものにして、さながら畫けるに異ならず、見るもの嘆賞せざるはなし、只是のみにあらず、そが煙包タバコの諸飾紙囊カミのかな物など、すべて狸にあらぬはなし、又好みて狸の寫眞をよくせり、予その畫きたる狸を見しに、形狀毛色分釐をたがへず、畫は唯狸のみよくして、その他のものを畫かずといひにき。

〔本間游清書簡〕出雲町といふ所に、狸庵といふ卜者あり、もとは中津の君の臣なりしが、彼家を出て、今は卜を以て世わたらひのたづきとす、性狸を愛して、家に二疋の狸を養ひ、己が子よりも深く愛し、食なども子には與へぬ時、狸には與へぬ、狸の話を書き、十卷ほど有て、いづれも二百葉づゝ、有といふ、狸の話を知る人あれば、百里を遠とせず、行て聞也、一奇人也。

〔百家琦行傳〕狸の卜者

是はいとく、近き寛政の頃なり、江戸銀座二丁目西側に、狸の卜者といふもの、在けり、名は何とか云けん、今忘れたり、這者いさゝかは學文もありて、會て語るときは十分おもしろき處あり、最一琦人にて、旦暮の行狀も人とは大いに異なる處あり、常に狸を好んで多く、家に飼おき、朝暮これを愛する事、世の婦女子などが、猫を愛るに異ならず、牀室には狸の軸をかけ、壁には狸の繪をここかしこにはり著、夏の浴衣に狸のもやうを染、冬は狸の裘を躬にまとひ、簷端易の招牌にも狸を忍がけり、爰を以て世人狸の卜者と呼なしけり。